

2026年3月26日発行 第743号



船井メールクラブ



いまお知らせしたいこと



(今回の執筆者：船井勝仁)



《目次》

- ねじれ場
- 地に足のついた現実家
- アメリカ帝国の黄昏
- 現代の稗田阿礼
- 万能でないナラティブ

●ねじれ場

今月も木曜日が4回なので、2月末の配信ですが2月14日の「ほんもの未来フォーラム2026」の小針ひろし先生、小針りさ先生のご講演に対するコメントから書かせていただきたいと思います。(※編集注：船井メールクラブの会員サイトで視聴できる動画です。「ほんもの未来フォーラム2026」での小針ひろしさん、小針りささんの講演動画です。)ご講演のタイトルは「情報場から最高の未来情報を引き出す包む意識の法則」です。

講演の主要テーマは「トーション・フィールド(ねじれ場)」です。1980年～90年代にソ連・ロシアのアナトリー・アキモフ、ゲンナジー・シポフ等によって提唱されたものです。

船井幸雄との関連で言うとハロルド・サクストン・バー博士が1940年代に提唱された「ライフ・フィールド(生命場)の鑄型」という話につながります。父はバー博士の『新版 生命場の科学』(日本教文社 <https://amzn.to/3NL7IFF>)等を紹介していましたし、さらに『百匹目の猿』(サンマーク出版)につながるルパート・シェルドレイク博士の形態形成場仮説から文脈を引き継いでいる研究とも言えて、船井本社関連ではとても馴染みのあるお話しになります。

このご講演の後、佐野浩一主幹が3月2日の船井幸雄.comのブログ(https://www.funaiyukio.com/funa_ima/index.asp?dno=202603001)で紹介させていただいている情報も合わせて参考にしていただければと思います。

素領域理論を研究している保江邦夫先生や台湾大学の学長を務められスタンフォード大学の電気工学で博士を取得されている李嗣涇先生などが積極的に取り上げていることで一定の学術的な裏付けが感じられます。ただし、ブログの中で佐野も書いているように一般的な科学者の間では疑似科学の烙印を押されているものになります。上記の父が推薦したものを含めて実証科学の分野では科学的に絶対に必要と言われている反証可能性が欠如しているという問題点が指摘されていて、必須とされている二重盲検法の手法が取られていないという批判があるようです。

私が親しくさせていただいていたある先生が、ご自身の製品の実証科学的なアプローチをするために公立大学の先生に二重盲検法の手法で論文を書いていただいたのですが、実験に多額の費用がかかるので高額な補助金を得られるような実験でないとなかなか実現が難しいということをおっしゃっていたことを思い出します。1940年代の生命場の研究は科学的にもしっかりしているものとされているようですが古いものですし、1980年代以降のものは主流の科学者からは相手にされていないというのが実状です。もちろん、保江先生は理論物理学者としての大きな実績をお持ちですし、李博士もご経歴からわかるように超一流の科学者ですが「トーション・フィールド」という分野は門外漢であるという批判がなされているようです。

ご講演の動画を見させていただいて感じたのは、小針ご夫妻の誠実なお人柄です。以上のような批判がある中で、かなりご苦勞をされてきたのだと思いますが、一般の人に役立つようにさまざまな工夫をされていて講演もワークプログラムを中心にその効果を体験できるものになっている印象を受けました。さらに、紹介されていたお二人のお名前を合わせたペンネームこぼりひさ名義で著された『人をうごかすふしぎな力』（サンクチュアリー出版 <https://amzn.to/3NVeSSI>）でも、ご講演で紹介されているものを含めて多くのワークが紹介されていました。

私も何度か受けさせていただいたことがあるメタトロンという機器が「トーション・フィールド」の理論を基に作られていることは有名ですが、そういう意味ではスピリチュアル業界ではかなり知られているものと言えるのだと思います。

いろいろ批判はあるのかもしれませんが、効果を感じる人が多い実践的なアプローチであり、本物のテクノロジーだと思われまので、科学の世界には批判があることも承知しながら、それと対立しないようにして有効に利用することが大切だと思います。私もいろいろなワークを実践してみたいと素直に思いました。

科学哲学・東洋思想・組織論・生命場理論にまでつながっていく文脈でとらえ、武道や気功といった科学の世界ではなかなかとらえきれないテクノロジーを説明するものひとつと

して考えればいいのかなと思います。

ユングの集合的無意識、仏教の阿頼耶識、老荘の道（タオ）、さらに船井幸雄の包み込み等を考える材料にもなりますし、最近の私の個人的な興味の強い分野でいうと小針先生たちは少し意識されているようにも感じましたが、量子力学の最も新しい概念のひとつであり実験でしっかりと確認されてノーベル賞も受賞されている「量子もつれ」にも関連していきます。科学者ではない私たちは疑似科学と目くじらを立てるのではなく、また科学的な裏付けがあるのだという意見にこだわり過ぎるのでもない柔軟性も持って使っていきたいものだと感じます。

●地に足のついた現実家

第1週目は、先月の矢山利彦先生に続いて生前の父が最も信頼していた一般財団法人アノアス代表理事で日本を代表する日月神示研究家のおひとりである中矢伸一先生と佐野主幹の対談です。（※編集注：今回の企画の第1回の中矢伸一さんと佐野浩一の対談動画について）

生前の父は中矢先生を「日本の神様や神道の研究における第一人者であり、しかも地に足のついた現実家でもある」として深く信頼していました。神道と書いていますが、父が主催する「直感力研究会」の中矢先生のご講演をお聞きした時のテーマが古神道だったことがあります。当時の私にはチンプンカンプンでしたが、いまならもっと大きなところで共感できるだろうなと感じたりしています。

今回の動画を見て最初に感じたのは、佐野が楽しそうだな、ということでした。中矢先生とここまで意気投合できるのがうらやましく思いました。私にとっては、父と本当にわかり合っておられたことに、もしかしたらちょっと嫉妬しているのかもしれませんが、中矢先生の現実的で論理的に妥協を許さない姿勢に接すると背筋を伸ばさねばと感じます。

親しげに話しかけるといふよりは師匠に対峙する弟子の気分で緊張するのですが、動画を見た感じでは佐野がリラックスした素の状態の中矢先生との対話を楽しんでいるのが印象的でした。

日月神示では大峠が来ると書かれています。それがいつのことかは、なかなか定かではないのですが、アメリカ・イスラエルのイラン攻撃から始まったホルムズ海峡のイランによる封鎖とそれによる原油の高騰、さらには金融市場の大混乱等の現象を見ていると大峠がまさにいまやってくるようにも感じますが、中矢先生のご意見はまだまだこんなものではない。富士山の登山に例えればまだ2~3合目ぐらいで、始まったばかりではないかという

話をしてくれています。対話の最後の方で、いろいろなことが起きるが、それをオロオロして慌てるのではなく、身魂を磨いているのだと楽しむという冷静さが必要ではないかという納得できる話で見事にまとめていただいています。

そのために昨年設立されたアノアス財団では、食料、水、エネルギー等生き延びるために必要なものを分かち合えるようなコミュニティの設立を目指されていると話してくれました。そして、大事なのは「和すること」という深い話につながっていきます。

話が合う人だけで集まっても仕方がない。意見の違う人が一緒に行動しながら、それぞれの立場を尊重して認め合いながらもより大きな意志をすり合わせていくことにつなげていくことが大事なのだという話に展開していきます。多様性という言葉の中矢先生は1994年の著書ですでに使っていることも紹介していただいて、最近言われている多様性のとらえ方にも疑義を示しています。

いま、マスコミが中心になって報じられている多様性は、ごちゃ混ぜにすることで、日本にも移民や旅行者など多くの方が訪れています。それを全部受け入れてただごちゃ混ぜにするのではなく、日本人の縄文時代からずっと続いている誇るべきアイデンティティを大事に守りながら、移民の方々のそれぞれのアイデンティティもしっかり保っていただきながら、お互いに「和する心」を持って尊重してわかり合えることを多様性というのだ、というご意見です。

ヨーロッパなどで表面化しているイスラム教のコミュニティとの対立関係に至るようにならないためには、どう工夫していくかを考えていかなければ真の意味での多様性を持つことは不可能だという話につながっていきます。

日本人が大きく変化していく兆候は明治維新に遡ることができますが、本格的に占領政策の影響を受けて変革していくのは戦後のことだというのが中矢先生のご意見です。

日本固有のあり方を否定するのが占領政策の目的であり、それは見事にいまでも機能している。ただ、俯瞰して見ると、縄文時代から考えると数万年続いて培われてきた日本人のあり方をたった80年余りで変えることはできないのではないか。表層的には変わってしまっているように見えるが、根本的なところではそんなに簡単に変わるわけがない。長期間にわたって戦争がなかったと言われている縄文時代の遺伝子をよみがえらせることが日月神示で示唆されているもっとも重要なことなのです。

高市総理は一見、そんな日本を取り戻す行動をされているようにも見えますが、二人の合意点はアメリカ（トランプ）に追従していただくだけであり、本当に大事な日本的霊性にまで至ってはいない。個々の霊性を上げることによって集団的無意識のレベルを上げていかなければこの大峠は乗り越えられない。

この辺りの認識は船井幸雄にも共通していましたが、ポイントは意識の底上げで、人間の集合的な意志に関わらずやがて必然的に起こるものだが、それを人間が自ら気がついて自分

たちの集合無意識を高めることによって成し遂げるのか、それとも神に強制的にしてもらうかの違いである。

前者であれば大難を小難にすることができ、比較的マイルドな移行ができるが、後者の場合は強烈な試練に直面して大難を乗り越えていかなければいけない。そういう意味で大峠を捉えていけばいいということになります。

(※この続きは、【船井メールクラブ】の会員様サイトからお読みいただけます)

* * * * *

《今回の執筆者：船井勝仁のプロフィール》

●船井勝仁（ふない かつひと）●

(株) 船井本社 代表取締役社長

1964年大阪府生まれ。

1988年(株) 船井総合研究所入社

1998年同社常務取締役 同社の金融部門やIT部門の子会社である船井キャピタル(株)、(株) 船井情報システムズの代表取締役に就任し、コンサルティングの周辺分野の開拓に努める。2008年「競争や策略やだましあいのない新しい社会を築く」という父・船井幸雄の思いに共鳴し、(株) 船井本社の社長に就任。

「有意の人」の集合意識で「ミロクの世界」を創る勉強会「にんげんクラブ」を中心に活動を続けてきた(2024年3月末に閉鎖)。

著書に『生き方の原理を変えよう』(2010年 徳間書店)、『未来から考える新しい生き方』(2011年 海竜社)、『船井幸雄が一番伝えたかった事』(2013年 きれい・ねっと)、『チェンジ・マネー』(はせくらみゆき共著 2014年 きれい・ねっと)、『いのちの革命』(柴田久美子共著 2014年 きれい・ねっと)、最新刊に『失速する世界経済と日本を襲う円安インフレ』(朝倉慶共著 2014年11月ビジネス社)、『SAKIGAKE 新時代の扉を開く』(佐野浩一共著 2014年11月 きれい・ねっと)、『聖なる約束 砂漠は喜び 砂漠は花咲き』(赤塚高仁共著 2014年11月 きれい・ねっと)、『智徳主義【まるUP!】で《日本経済の底上げ》は可能』(竹田和平、小川雅弘共著 2015年10月 ヒカルランド)、『日月神示的な生き方 大調和の「ミロクの世界」を創る』(中矢伸一共著 2016年 きれい・ねっと)、『聖なる約束3 黙示を観る旅』(赤塚高仁共著 2016年 きれい・ねっと)、『お金は5次元の生き物です!』(はせくらみゆき共著 2016年 ヒカルランド)がある。

* 船井幸雄.com <http://www.funaiyukio.com/>